

えりも地域ゼニガタアザラシのモニタリング方法に係る作業部会
(モニタリング作業部会) の検討状況報告

○開催状況

第1回作業部会：平成29年 8月21日

第2回作業部会：平成29年12月28日

○参加委員

松田裕之教授（横浜国立大学）、小林万里教授（東京農業大学）、北門利英教授（東京海洋大学）、三谷曜子准教授（北海道大学）、山村織生准教授（北海道大学）

○検討内容

1) 陸上センサス以外の手法を用いたモニタリング方法の可能性について

| | |
|---------------------------|--|
| UAVによる生息数把握 | H30年(2018年)以降も陸上センサスとあわせて実施し、陸上センサスデータの補完(発見率の補正)、大まかな年齢別上陸数の把握(性別は判別不可)、将来的な生息数調査への活用を検討。 |
| 遺伝子解析による推定、 標識再捕獲による推定 | 方法論等を引き続き検討。 |

2) 現在のモニタリング方法について

| | |
|----------|---|
| データ精査 | 過去(H23年(2011年)以降)の捕獲・混獲データを精査した。 |
| 年齢査定 | (少なくともH30年(2018年)までは)回収した全個体について歯腔等により年齢を査定する。H31年(2019年)以降は結果を踏まえて、調査方法を検討。 |
| 混獲数 | カレイ刺し網等の実施時期等を確認し、漁業者アンケートと東京農業大の回収データを突合させ、春と秋の混獲にわけて整理(確実に回収された数値を優先)。 |
| 調査頻度等の影響 | 調査頻度の低下による上陸確認数への影響を検討する。 |
| 上陸割合 | 現在の上陸割合は幼獣に偏った調査結果から算出されており、生息数が過大評価されている可能性がある。幼獣と亜成獣に分けて上陸割合を再度算出するとともに、定期的に(極力、成獣を含めた)放獣個体を確保し、上陸割合を調査すべき。 |
| (言葉の整理) | ●上陸割合：個体群全体のうち上陸している個体数の割合(電波発信機で調査) ※目視観察を行っていない夜間の値は抜いて計算している。 |

| | |
|----------|--|
| | ●上陸率 : 個々の個体が一定期間中、どの程度上陸していたか(GPSで調査) |
| (回収) 漂着数 | 各年 0-4 程度であり、自然死として個体群動態シミュレーションに反映させない。 |
| データの反映 | 上記データを (H31 年 (2019 年) 度からの) 次期管理計画に反映。 |

3) 想定捕獲と実捕獲の年齢構成の差異について

- ・今年度、捕獲個体が当歳と幼獣に偏っていたことによる影響評価について、北門委員に算出いただく。